

第六章 プロジェクションが認識世界を豊かにする―救済―

「推し」の真髄

「推し」の〇〇に出会って人生が変わった―と熱心なファンはよく言います。実際、そのとおりなのだと思います。けれど、「推し」がむりやりあなたの人生を変えたものではありません。あなたの人生が変わったきっかけは「推し」ですが、人生を変えたのはまぎれもなくあなた自身です。そしてそれこそが、「推し」の真髄です。

人生、というとおおげさかもしれませんが、それまでの自分の生活にはなかった行動や考え方をするようになることは、生き方を変えることだともいえます。自分が熱愛する対象によって、自分から能動的になにかのアクションを起こすようになる。それが、受動的になにかを愛好するようなファンと、なにかを「推し」として熱愛するファンの決定的な違いであると私は

考えています。

「推し」を持つファンたちの能動的なアクションには、実にさまざまなものがあります。ファンのアクションは、SNSへコメントしたりファンレターを書いたり、ライブで声援を送りながらペンライトを振るなど、「推し」対象に向かって直接的になされるものだけとはかぎりません。オリジナルを参照しつつ「推し」の新たな物語を生成したり、「推し」に関係のある別の分野にまで関心を持ったり、「推し」を模したコスプレをしたり、「推し」をかたどったぬいぐるみやフィギュアの写真を撮ったり、「推し」本人不在の誕生日会を開いたりします。この本では「推し」に関わる行動や気持ちの例を端緒として、人間のさまざまな認知活動とプロジェクトエクシジョンという機能の深い関わりについて考えてきました。

「推し」が頑張っている姿を見ると、自分も頑張れる。「推し」のようになるために自分も努力する。「推し」がいるとなんでもない日々でも楽しい。「推し」のつながりで友人や仲間、居場所ができた。つらいことがあっても「推し」から元気がもらえる。「推し」に癒やされる。どれも「推し」がいるという人たちから、よく語られることばかりです。また、「推し」は特にないないという人から、「推し」がいる人は楽しそうでうらやましい、自分にも「推し」がいたらいいのと思う、などということもよく聞きます。

どうにかまた頑張ろうとするのも、いっちょやってみるかと努力するのも、目の前にある日常を楽しんで生きるのも、新しい友人を作るのも、それは自分自身です。ただ、自分だけでは動きだせなかったほんの一步を踏みだせるよう、力強く背中を押してくれたのが「推し」なのでしょう。そう考えると、「推し」を推すことは、自分自身の生きる力を推進することだといえます。だからこそ、社会が停滞していると感じられるいまの時代に「推し」が求められ、また「推し」がいる人のエネルギーが羨望されるのかもしれない。

プロジェクトを介してなされる「推し活」や「推して推される」という相互作用は、「推し」と自分の境界を曖昧にします。ここまで考えてきたように、ときに「推し」は、自分の表象の投射対象でもあり、自己世界の拡張でもあり、新たに加わった自分の領域でもあり、自分へ逆投射してくる存在でもあります。いずれにしても、自分という代えがたい存在の一部に組みこまれたものとして「推し」をとらえるのなら、「推し」が自分にとってどのようなものか、よくわかるのではないでしょうか。

若手俳優の熱心なファンでもあるライター（たがねよしあき）の横川良明さんの著書に『人類にとって「推し」とは何なのか、イケメン俳優オタクの僕が本気出して考えてみた』という本があります。その本の最後で横川さんは、「推し」とは何なのか定義づける必要はない、人それぞれの答えがある、としながら「でももしその前提で、最後に推しとは何かと聞かれたら、僕はこう答えます。推しとは、『お守り』と書いています。」

「推し」は「お守り」であるとは、なるほどーと得心しました。なぜなら、お守りこそプロジェクトのプレスレット、十字架のついたロザリオ、家内安全のおふだなど、身近で「お守り」としてありがたがられるものはいろいろあります。しかし、その「意味」がわからない人にとってそれは、すごく小さな布袋、きれいな石のプレスレット、飾りのついたネックレス、文字が書かれた紙切れ、などにすぎません。

神社やお寺にあるすごく小さな布袋は、その意味がわかったうえで「信じるこころ」が投射され、はじめて「お守り」となります。他もしかりです。以前、家の部屋の片隅に小石があったので、子どもの服にでも入っていたのが落ちたのかと思い、外に捨てようとしたら、子どもが気づいて「それ、おまもりなの、捨てないで!」と必死で訴えるのでびっくりしたことがあります（うっかり捨てないで本当に良かった……）。これもプロジェクトです。

「推し」と生きがい

「推し」をお守りのようにとらえてみると、そこに投射されているものは「信じるころ」ならぬ、熱心なファンひとりひとりの「自分が世界を意味づけて生きてゆく力」なのではないでしょうか。人によってそれは、「生きがい」ともいえるかもしれません。

「生きがい」だなんて、おおげさに思えますか？ 私は大学では、「老年心理学」といって、高齢者のこころや行動を専門に教育・研究をしています。高齢者にとって「生きがい」は決しておおげさなことではなく、切実で日常的な問題です。日本はいま、世界一の高齢社会です。現在の日本の高齢者は、仕事や子育てなど否応なく求められてきた役割を終えた後にも、長い人生があります。「なんのために生きているのか」など考えるまでもなく生活に追われていた日々はいつか終わり、「なにをして生きていくのか」を自分で考えなければならぬ日常がやってきます。それは思うほどたやすいことではありません。

しかし、高齢者は試行錯誤しながら、日々の生活のさまざまなことに「生きがい」を見いだしています。実に、高齢者の八割は「生きがい」を持っている、というデータを講義で示すと、大学生は一様に驚きます。けれど、「生きがい」はおおげさなことではなくていい、身の回りに

生きる意味や楽しみは見つけられるのだということが、高齢者の生活を見るとよくわかります。

本書の担当編集さんがこんな話をしてくれました。編集さんのお母さんはわりと快活な人だったそうですが、コロナ禍でかなり弱気になってしまいました。「もう人生に楽しいことなどない」とネガティブな発言も多くなり、心配した編集さんは動画配信サービスを入れたタブレットを送ってあげて、観るようにすすめました。すると、お母さんは観はじめた韓国ドラマにすっかりハマってしまい、自分が観たドラマの配役や人物関係図、なんとレビューまで書いた「鑑賞ノート」を作成しているそうです。そして、韓国ドラマをきっかけに、興味は異国の文化や語学の学習にまで発展し、いずれ韓国に行くことを目標に日々励んでいるとのこと。お母さんにとって、もうこればかりっぱな「推し活」であり、素晴らしい「生きがい」です。

熱心なファンの「推し活」を見てみると、高齢者になっても「生きがい」には困らないだろうなと安心します。自分の気持ちひとつあれば、何歳からでも新しいことは始められます。これまでのしがらみから解放され、自分が本当に好きなことを見つけて思いきり楽しんでいる、そんないきいきとした高齢者はたくさんいます。なにかを熱心に愛好することが生きる力につながっていると考えると、この超高齢社会で楽しく生きていくには、「推し活」こそ大事なのかもしれません。

プロジェクションと多様性

個人のプロジェクションは、ときに個性としてあらわれ、ときに価値観として示されます。その人の見ている世界は、その人にしか見えないプロジェクションがなされているわけですか

ら、プロジェクションとは、つまり多様性そのものです。

自分には自分のプロジェクションがある、あの人やその人にはそれぞれのプロジェクションがある、それを知ることが多様性を知ることです。その人のプロジェクションを受けとめることは、その人そのものを受けとめることと同じであるならば、その人のプロジェクションによって見えている世界を否定することは、その人を否定することと同じです。

ある人には見える世界が、自分には見えないこともあります。自分にとって意味のあることが、ほかの人には意味がないこともあります。それはプロジェクションが個人の機能であるため、あたりまえのことなのです。そのように、基本的には個人の機能であるプロジェクションが、なにかのばあいには他者と共有されることもあるからこそ、それは大きな喜びや連帯となります。そして、プロジェクションの共有によって、人間はわかちあつて協力することが可能となり、ともに未来への希望を持つことができます。

ある人には見える世界が自分には見えない時、重要なのはそれが見えるかどうかではありません。その話が本当かどうかでもありません。ある人には見えたということを受けとめることです。そして、ある人にとって見えたという事実の「意味」を大切にすることです。

多様性のある世界とは、たがいのプロジェクションをたがいに受けとめられる、そしてその

意味を尊重できる、そんな世界のことではないでしょうか。これまでに本書で見てきたさまざまな人間の認知活動を考えると、理解するとか認めあうなどということよりずっと前に、まずは雑多なプロジェクションがただ乱立できるような、そんな土壌こそ力強く豊かな文化を育んでいくように思います。

世界はプロジェクションで豊かに彩られている

「推し」をガイドブックにしてプロジェクションをめぐる旅も、そろそろ終わりに近づいてきました。あなたの身の回りのプロジェクション、あなたがさまざまなモノや出来事に対してしているプロジェクションについて、「なるほど」という想いを抱いていただけたなら幸いです。

いま、あなたが手にしてくださっているこの本も、あなたのプロジェクションがなければ、ただの綴じられた紙の束（あるいはタブレット）にある文字の羅列にすぎません。私が書いた文章のかたまりは私の手を離れ、読者のあなたによって「なにかについて書かれた本」という存在になります。では、どんな内容の本だったのか？ その答えは、小説ほどのバリエーションはないとしても、読者によって異なるでしょう。同じ本を読んでも、受けとり方はそれぞれで

す。それは読者によるプロジェクションが異なるからです。

世界に存在するモノや出来事は、プロジェクションによって「意味」を持ちます。モノや出来事に付帯した意味は、それらが存在する世界を立体的にたちあがらせます。モノや出来事に投射される表象は、想い、主張、価値観、解釈、仮説、願い、希望、意識、無意識……言葉に数えきれないほどのプロジェクションで彩られているのです。

他者を一生懸命に応援すること、既存の物語から新たな物語を生成すること、いまだ解明されていない真理の探究、個人の信心から世界的な宗教への発展、一枚の絵画が内包するメタファ、時間と時間をかけて育成する喜び、演者と観客の相互作用、未来の文化への投資、ぬいぐるみとの豊かな時間、モノを介して飛躍する自己と拡張する身体、投射で救済されること、個性や価値観の多様性……本書では、私たちのいろいろなありように、プロジェクションが深く関わっていることを見えてきました。ファン活動、科学研究、宗教、芸術、文化など、どれも私たちの人生や生活をより豊かに潤してくれるものばかりです。そして、それらを手に入れることができたのも、人類の進化の過程において、プロジェクションという機能が重要な役割をはたしてきたからだと考えられます。

人間は、自らをとりかこむ物理的な世界をより深く豊かにするために、プロジェクションと
いうところの働きを備えています。私たちは、モノの世界のなかでただ受け身的に生きている
のではなくありません。私たちは、プロジェクションによって、モノの世界を自分で意味づけて生
きているのです。そして、それは個人のなかで、あるいは他者と共有されて、時間や空間を超
えながらどこまでも広がっていくことができるのです。

あなたのプロジェクションで彩られた世界を、あらためて眺めてみませんか？ 新たな発見
が、あなたの世界を新たに彩り、またいつそう深化させてくれるに違いありません。

JASRAC 出 22032801303

久保(川合)南海子くぼ(かわい)なみこ

一九七四年東京都生まれ。日本女子大学大学院人間社会研究科心理学専攻博士課程修了。博士(心理学)。日本学術振興会特別研究員、京都大学霊長類研究所研究員、京都大学こころの未来研究センター助教などを経て、現在、愛知淑徳大学心理学部教授。専門は実験心理学、生涯発達心理学、認知科学。著書に『女性研究者とワークライフバランス キャリアを積むこと』(新曜社)ほか多数。

「推し」の科学 プロジェクション・サイエンスとは何か

二〇二三年八月二三日 第一刷発行
二〇二三年十一月六日 第三刷発行
集英社新書 一二七G

著者……久保(川合)南海子

発行者……樋口尚也

発行所……株式会社集英社

東京都千代田区一ツ橋二五二一〇 郵便番号 一〇一八〇五〇

電話 〇三三三三〇六三九一(編集部)

〇三三三三〇六〇八〇(読者係)

〇三三三三〇六三九三(販売部)書店専用

装幀……原 研哉

印刷所……大日本印刷株式会社 TOPPAN 株式会社

製本所……加藤製本株式会社

定価はカバーに表示しております。

© Kubo-Kawai Namiko 2022 ISBN 978-4-08-721227-3 C0240

Printed in Japan

